



38 雨後 川合玉堂

一幅

大正十三年（一九二四）  
絹本着色  
九五・一×一七六・〇

夏の雨上がり、空気には潤いが満ち、射し込んだ陽光によって空には虹がかかる。そうした美しい自然の中で、蓑笠をかぶった男達は雨で中断していた作業に勤しんでいる。ここで作者が描くのは特定の名所や景勝地ではない。本図の主眼は、光と大気が織りなす自然の豊かな表情であり、またそうした自然と労働する人間との共生であった。十九世紀のフランスではミレーやコロドーラバルビゾン派と呼ばれる画家らが、自然とともに生きる農民の姿を深い共感を込めて描いたが、こうした自然主義的風景画の影響が

色濃く感じられる作品である。

川合玉堂（一八七三～一九五七）は、京都で望月玉泉、幸野楳嶺に師事した後、上京して橋本雅邦に入門した。展覧会で受賞を重ね、文展が開設されるとその第一回から審査員をつとめるなど官展を中心に活躍した。本図も大正十三年（一九二四）の第五回帝展出品作であり、宮内省によって買い上げられた。「そのたしかな表現に、日本畫のゆくべき一方の道を、適確に示してゐるものとして、やはり敬意を表せずばなるまい」（『アトリエ』大正十三年十一月号）として、当時から高い評価を得た玉堂の代表作である。この後も玉堂は、農村や漁村、田園風景など豊かな自然の中で生きる人々の姿に焦点をあて、その中で移ろう四季や潤いに満ちた大気の表現を模索し続けた。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 名所絵から風景画へ——情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 76

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanjūmaru Shōzōkan